
いのちづな。

春野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いのちづな。

【Nコード】
N2790G

【作者名】
春野

【あらすじ】
夜の街。「私」は「あたし」として、存在していた。でも、今日でおわり。今日でやっとさよならできるんだ。そして、憧れのあの人が生まれ育った街へ旅立つ。

上（前書き）

上・中・下の3話連載でお送りしたいと思います。

上

「…おい、そのネクタイこっちに投げてよこせよ」

化粧台の前で、ワイシャツを着ている男が私に命令する。

ベツトに腰掛けながら、私は周りを見回した。

2、3回繰り返す。

「ちゃんとみるよ。そこだよ、そこ！」

「…そこってどこ」

「お前の足元だよ。ちゃんと見ろって」

足元に落ちている、グレーのネクタイをつかむ。

「早くこっちに投げろ。…あ、やっぱりいいや。お前が俺にネクタイつけろよ」

私は内心で、は？と。

「早くネクタイ見つけれなかった罰だよ。こっちにきて、ネクタイつけろ」

「あたし…ネクタイなんてつけたことないもん」

「あ？こんな仕事してるくせに、それくらいもできねえのかよ。…」

「まったく、やっぱこういう仕事してる奴ってバカなんだよな」

ネクタイを男に投げた。

「でも、本当は投げつけてやりたかったんだ。」

「俺さ、帰んなきゃなんねえんだから、早く着替えろよ。お前だけ置いてくわけにもいかねえから」

「まだもらってない」

「あ？」

「まだもらってないから、着替えない」

「あー、金のこと？俺、今それどころじゃねえんだよ。終電間に合わなかったら、またあいつの八つ当たりくらうんだって」

男は手早くネクタイを締めて行っただ。

これは相当急いでいる様子だ。

「奥さんと仲悪いの？」

「仲あ？…悪いんじゃないの。外から内からどうみても。この頃あいつ本当にイライラしてて。なんだっけ、ほら…あの、…あれだよ。あれ！」

髪型で若く見せようとしても、頭がついていかないらしい。

「…あ、育児ノイローゼ！あれだ、あれ。2人目産んでからイライラ、イライラって。いい迷惑だよ」

「2人も子ども居るんだあ。けっこう年取ってから生まれたんだね」

「そーだよ」

「へえー…」

実際、こんな親父の身内話はどうでもよかった。

わたしはお金をもらえればそれでいいから。

「ほら、やるよ」

男は札を投げてよこした。

カーペットに散乱した札を拾いに、ベットから降りる。

「やべつ。本当に終電いっちまう」

腕時計に目を落とし、急いで部屋から出て行った。

…なんだ。たった7000円か。

1人で1階ロビーへと降りていくと、受付にはびったりと寄り添い

ながらコースを決めているカップルの姿があった。

…そう言えば、あの女は昨日も池袋のホテルでみたなあ。

そのままホテルを出ようとすると、店員に声をかけられた。

「お客様！料金が未払いですっ」

…あの男。金も払わないででいったのか。

「5000円になります」

7000 - 5000 = 2000。

『2000円の女』か。

料金を払い、お釣りの2000円をくしゃくしゃにしてポケットに押し込んだ。

外に出ると、どこかの会社の上司と部下。キャバ嬢に誘われている親父。ホストと一夜の夢をともにしている人妻。みんながそれぞれの事情を抱えて、ひしめき合っていた。

こんな世界、やめてやる。なんとそう思っただろう。

金を稼ぐために、少し足を浸しただけだった。

でも、底はそんなに浅くなかった。みるみるうちに吞まれていく。

「酸いも甘いも楽しませてくれる場所なんだよ。ここは」いつか私にそう言った男がいた。

「甘いなんてないじゃん。本当は、酸っぱいじゃん」私はその時
そう思った。

でも、現実にはあなたが嘘じゃなかった。ただ唯一間違っている場所はある。

『酸いも甘いも楽しませる場所』って言うのが本当。

でも、そんな場所とももうお別れ。

やっとお金がたまつたんだ。しかも、ちょうど肌寒いこの季節に。

ただ少し悔いが残るのは、最後の相手があんな最低な男だったってこと。

明日の朝、私は旅立つ。憧れのあの場所へ。

中

先生ー。

「ん、どうした？」

先生の生まれたところってどこ？

「生まれた所かー。俺の生まれたところは、北海道だよ」

へえー。北海道のどこ？

「函館」

…ハコダテ？それってどこ。

「覚えてないのか。昨日の授業で教えたろ。1854年、日米和親条約で下田と一緒に開港された貿易港のひとつだぞって」

放課後の時まで、勉強の話なんか聞きたくない。

「なんてってゆーな。なんてって」

はあーい。…でも、先生が授業の時に『函館は俺の生まれたところなんだぞー』って言うてくれたら、絶対覚えてたよ？

「はははっ。本当か？」

うん。ほんとほんと。絶対に覚えてた！

「じゃあ、そう言っとけばよかったな」

なんでそう言わなかったの。

「ん？…言いたくなかったから」

それじゃ、わけわかんないよ。もっと深く言って！深く。

「もっと深く言っと、か？深く、なあ…。しいて言うなら、自分の中だけの場所にいと来たかったから。ってかんじだな」

自分の中だけの場所…

「うん。函館はな、治安は悪いとかってよく言われるけど、いい所だよ。こんな俺でも、なーんにも言わないで受け入れてくれる街」

へえー。じゃあ、いいことばかりのとこだったんだね。先生にとつて。

「いいことばかりかあ。…いや、今から考えればいいことなんて数えるくらいしかなかった」

…それなのにいい街なの？

「うん。いい街。冬なんて特に」

そーなんだ。

「いつか行ってみればいいよ。きっと安岡ならわかる」

え、私？すつごくバカなのに！？

「馬鹿なんかじゃないよ。安岡は全然バカじゃない」

そーかなあ。私、すつごくバカなのに。勉強とか、もうその言葉聞
いてるだけでヤダし。

「そんなことだけでバカなんて言わないよ」

…でもさ、そんなバカな私に先生の中だけの場所に行ってみればい
ーよ。とか言っちゃっていいの？

「全然。むしろ行ってみようよ」

……どうして？

「ん？行ってほしいから」

そんな言い方じゃ、わけわかんないんだってばー！

「はははっ。ほら、もうそんなことはいいから。いい加減に帰るぞ」

先生ってば、今の言葉の意味教えてよー。

「期末で100点取ったら、教えてやってもいいけどなあ」

だからー、私はバカだから無理なの！

「ほら、行くぞ」

先生、教えてよー！

冬景色。

そんな言葉をよく聞いたことあるけど、自分自身の目で、生で見るとこんな感じなのだろう。

すつぱりと白い粉を身にまとい、寒いけれど、冷たいけれど、なぜか暖かみがある風が吹いている。

そっか。先生はこんな中で暮らしていたんだ。

きしきし、と鳴る路をあるいていたんだ。

上を見上げると、星も見えないくらい真っ暗な空から落ちてくる真っ白な粒。

果ても分からない夜空から、限りなく落ちてくる通は私の頬を撫でる。

そっか。先生はこんな心地良さを知っていたんだ。

昔、私の友達が「曇ってる夜空を見ると、自分が吸い込まれて行っちゃうそうでなんか怖くなる」そう呟いていたことがあった。

でも、こんな夜空になら吸い込まれてもいい気がする。

いや。いつそのこと吸い込まれてしまいたい。

良いことだけ持って、悪いことだけ捨てて。

…だけど、そんなことは考えちゃいけない。自己中すぎる私の始まりだ。

こうやって「生」を受けてこの世にいる以上、「良いことだけ」なんてそんな安易なこと。そんな幸福なこと。たやすく考えちゃダメなんだよ。

私はきしきし、と白い吐息を吐きながら、当てもなく歩いた。

下

先生って屋上好きなの？

「えっ？…なんでそう思うの」

だっていつも暇さえあればここにいるじゃん。だから好きなのかなあーって。単純にそう思っただけ。

「いや、好きなわけじゃないよ。ただ、これがほしいからここにきてる」

煙草吸うため？ただそれだけなの？

「校内で教師であろうものが、生徒の面前で堂々と吸ってらんないだろ。だから、隠れて煙草吸ってる」

ふふっ。

「…なんだよ」

だって、先生も生徒みたいなことするんだなって思っただけ。こそこそ煙草吸おうとするなんてさ。不良生徒の考え方みたいで笑えたの。

「大人だって不良になりたいこともあるの。…ま、俺のほかにもこうやってたばこ吸う場所を探してる先生って、結構いるからなあ。ここだけの話だけ」

そーなの！？PTAにバレたらヤバいんじゃないのー。

「みんなでやれば怖くない、だな」

あははっ。なんか今日の先生、クラスの男子みたい。

「そうか？俺はいつも若々しくって心がけてるんだけどなあ」

でも、その割にはなんか足りないよ。

「なにが？」

んー、なんて言えばいいのかなあ。……きりつとした、ぱりつとした、しゃきつとした。なんかそーいうの。

「十分きりつとして、ぱりつとして、しゃきつとしてるだろ」

…お世辞にもそーだね。って言えないなあ。私からは。

「あ、今、上からしゃべったな」

まーまー、いいじゃんっ！…私はそーいうのいいなあって思っけど？

「“そういうの”って“どついうの”だ？」

なんかさ、しなつとした、ぼさつとした、だるつとしてるかんじ。

「…俺がそう言う感じだったこと？」

……うん。

「失礼だなあ。一人の教師として、生徒にそんなこと言われるとは思わなかったよ」

私から見たら、先生はそんな感じに見えるんだもん。でも、若々しいよりはいいーなって思うけど？

「…そうか！安岡はだらした人が好みなんだな。森川先生みたいな感じの」

ちがうちがう！！そんなこといつてないよ！！森川みたいなのは、絶対に死んでもヤダ！

「あははっ。先生に向って呼び捨てすんなよー」

…はぁーい。

異国情緒漂う街並み。その中を、粉雪に包まれながら私は歩く。

オレンジ色の街燈が坂道に沿って、上へ上へと続いている。やっぱり、最後のところを選んでよかった、としみじみ思った。

その景色を見上げると、坂道の中腹ぐらいに1人の男性が降りてきているのが目にとまった。

きつと、生きていれば私のお父さんより少し年下くらいだと思う。

周りにはもうすでに誰も歩いていなくて、家々の明かりも消され、カーテンも閉め切られているような時間帯にしては、その人は酔っているわけでもなく、帽子をかぶってただ歩いていた。

白いこの世界には、まるで私とその人しかないような気がした。

知り合いでもないその人と。

…そんな不思議な気持ちにとりつかれていると、雪道に足元をすくわれ、私はその場に尻もちをついた。

いつてえ。と言葉を漏らしながら、近くのベンチに座って靴の中に入ってしまった雪をほろつた。

「そんな靴履いてれば、転ぶのも当たり前じゃないか」

気がつくときさっきの人が、私の近くまで来ていた。

「今日みたいな雪だと特に気をつけなくちゃならないんだ。つるつるした路面の上を粉雪が覆うから」

言われてみれば、向こうの感覚で冬靴じゃないものを履いてきたから、こんな道で滑るのも当たり前だった。

「観光？」

「んー、そんなかんじですねえ」

「そうかそうか。ま、あつまり人には言えない事情があつてこつちに来てみた訳だな…隣、いいか？毎日眠れなくなると、このベンチで一服するのが俺の楽しみなもんでさ」

ポケットからマルボロのつぶれかけたケースをとり出し、私に尋ねた。

どうぞどうぞと返事を返し、右側に移動した。

ベンチに薄っすら積もった雪をほろい、左側に腰掛けて、その人はケースから一本取り出しくわえた。

どこかの店名がプリントされているクリアブルーのライターで火をつけ、大きく息を吸い込んだ。

「この調子だと、明日は冷えるな」

「…なんでわかるんですか？」

そついうとその人は、ポケットに突っこんでいた右手の人差し指を立てて、天上に向けた。

指さす方向を見ると、5分の1欠けた月が独りぽかり、と浮かんでいた。

あまりの明るさに周りの雲が透けている。

「月とか星がものすごくすつきり透き通って見える夜は、次の朝、だいたい冷える。…ま、だいたいだけどなあ」

「へえー」

「…それでその月や星を見て、自分もすつきり透き通った気持ちになる夜は、次の朝、絶対に冷える。青空が広がる朝で」

そう言われて、もう一度上を見た。

でも、もうすでに雲で陰って月は見えなくなっていた。大きな大きな雲の陰になって。

「…雪国の青空ってどんなかんじですか？」

「見たことないのか？」

「はい。…残念ながら」

「じゃあ、どんなものだと思う？…直感でいいよ」

「直感ですか。…青々としてて、爽やかで、きれい」

「って大体の人は答えるんだよ」

「ちがうんですか？」

煙をふ、と吐き出す。マイナス気温なか、空気は煙までも美しく魅せた。

「本当はものすごく淋しげなんだよ。空の色、雲の密度、すべてが薄い。寒々として、淋しくて。…でも、空気だけがピンと張ってる。まるで琴線のように。そして、その中で目を細めると、なんだかうれしくなれる。細めた目ですべてを見渡すと、なんでもできそうな気になれる」

想像しても追い付けなかった。

だって、私の中では青空は元気な証拠の一つだと思っていたから。

でも、それが淋しげ。

でも、目を細めるとうれしい。

「…きつとわからないと思う。でも、明日になればわかるよ」

「明日までには、私、いないから」

「明日までいようと思ったら、いれるさ」

「…青空。見れるかな。…私、バカだから、空が見せてくれないかも」

その人は上をさした。つられて上を見る。

さっきまでの大きな大きな雲が去り、5分の4の月がいた。

「俺がすっきり透き通った気持ちだから大丈夫。…しなつたとした、ばさつとした、だるってしてる俺がそういうんだから」

煙草を地に落とし、ゴム底で踏みつけてベンチを立った。

「バカなんて言うんじゃない。自分のことを。…ここまでちゃんとやってきたんだから、バカじゃない。もちろん、このずっとずっと先も」

私に笑顔を送って、その人は猫背で坂を登って行った。

もう一度、月を見る。

なんか、ぼやけて二重に見えるじゃん。……バカ。

仕方ないから、青空、探してみるよ。

この先も、ずっと。

いろんな青空を。

e n d

下（後書き）

感想・アドバイス・問題点などありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2790g/>

いのちづな。

2010年10月28日03時47分発行